シグマ委員会だより（Ⅲ）

1988年核データ研究会

（日立エネ研）　瑞慶覧　　篤

昭和最後の年であり，シグマ委員会創立25周年にあたる記念すべき核データ研究会が，去る12月８，９両日にわたって，茨城原子力センターで開催された。多数の方々のご協力により，参加者106人をえて，成功裏に幕をとじる事が出来た。出席者および関係機関にまずお礼を申し上げます。

さて，今回は第１日目に原研核データセンターの五十嵐氏がシグマ委員会25周年の記念講演を行い，その後，ＪＥＮＤＬ－３の公開に向けた評価作業の進捗状況と積分データによる断面積の調整の問題点を主要テーマとして，講演と熱心な討論がなされた。第２日目は，新分野における核データ利用を促進するため，ＳＯＲの開発計画と今後の核分理，原子物理への新分野開拓の可能性について原研の中井氏にご講演をいただいた。一方最近の情報化社会のニーズに答えるべくデータ・ベースの現状と将来について東大の岩田先生と原研の菊池氏にご講演をお願いした。その他，ポスター・セッションとして，合計18件の発表が熱心に行われた。また，核データ評価の基礎として，原子核の電磁相互作用について，実験データから得られた新しい知見について東工大の北沢先生に，特殊目的核データの評価と諸問題についてＮＡＩＧの飯島氏にご講演をいただいた。さらに，日米共同研究の臨界実験解析にＪＥＮＤＬ－３Ｔを使用した場合の解析結果について動燃の福村氏にご報告をいただいた。

今回，特に注目され，熱心な討論が交わされたのは，約50keV 以上のエネルギー領域におけるＵ－238中性子捕獲断面積の評価値が顕著に小さくなる傾向がある点であった。この傾向は，積分データの実験解析にみられる計算値と実験値の矛盾を解消するばかりでなく，炉心設計へのインパクトが大きい問題である。本号の核データ・ニュース（Ｐ.57）に関連事項が述べられている。なお，核データ研究会の報文集がＪＡＥＲＩ－M89-026 に掲載されますので，ご参照下さい。

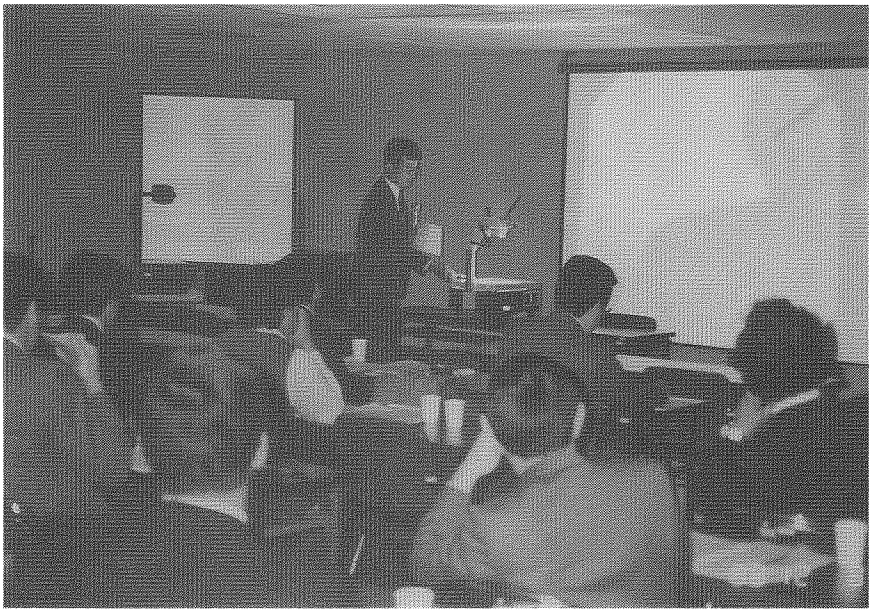

写真１　核データ研究会口頭発表の様子

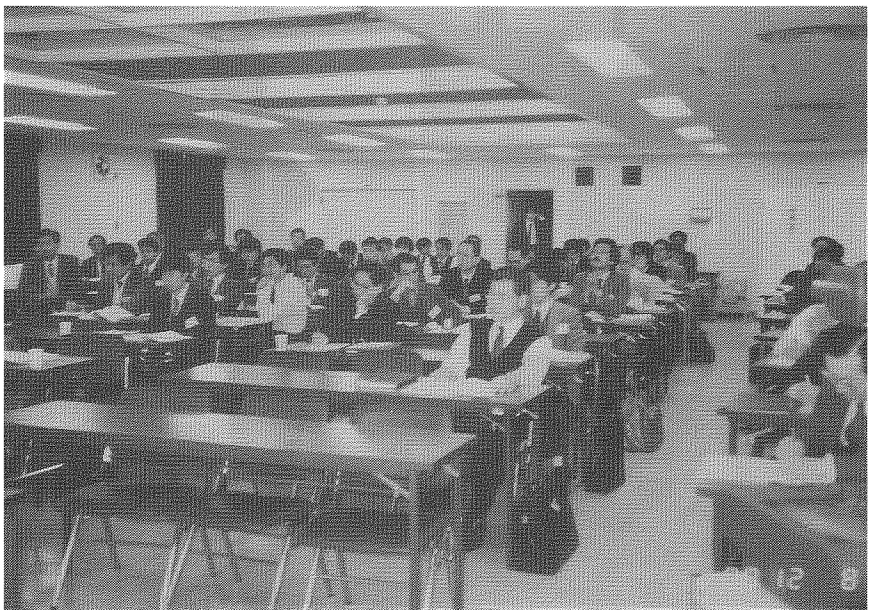

写真２　口頭発表を聞く参加者

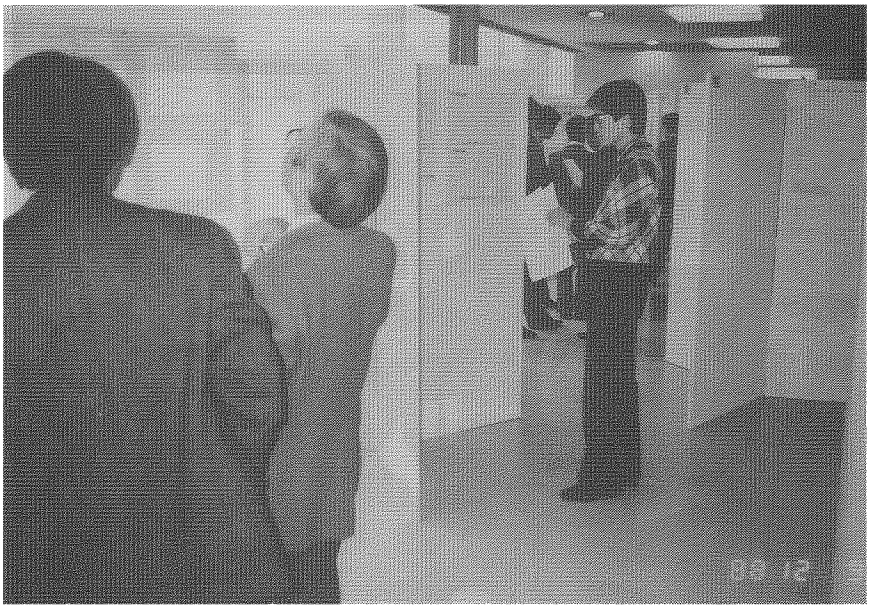

写真3　ポスターセッション

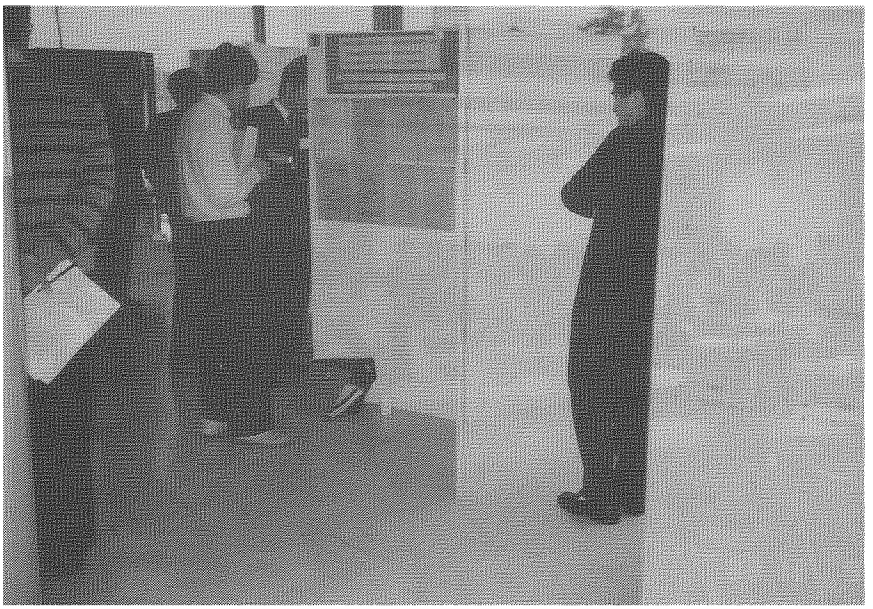

写真4　ポスターセッション

写真５　原研阿漕ケ浦クラブでの懇親会